

本章は図-1中の「P1・丁石始端点」における起点記念碑と刻字碑文の解説を踏まえた寄進奉納関係を取り上げる。

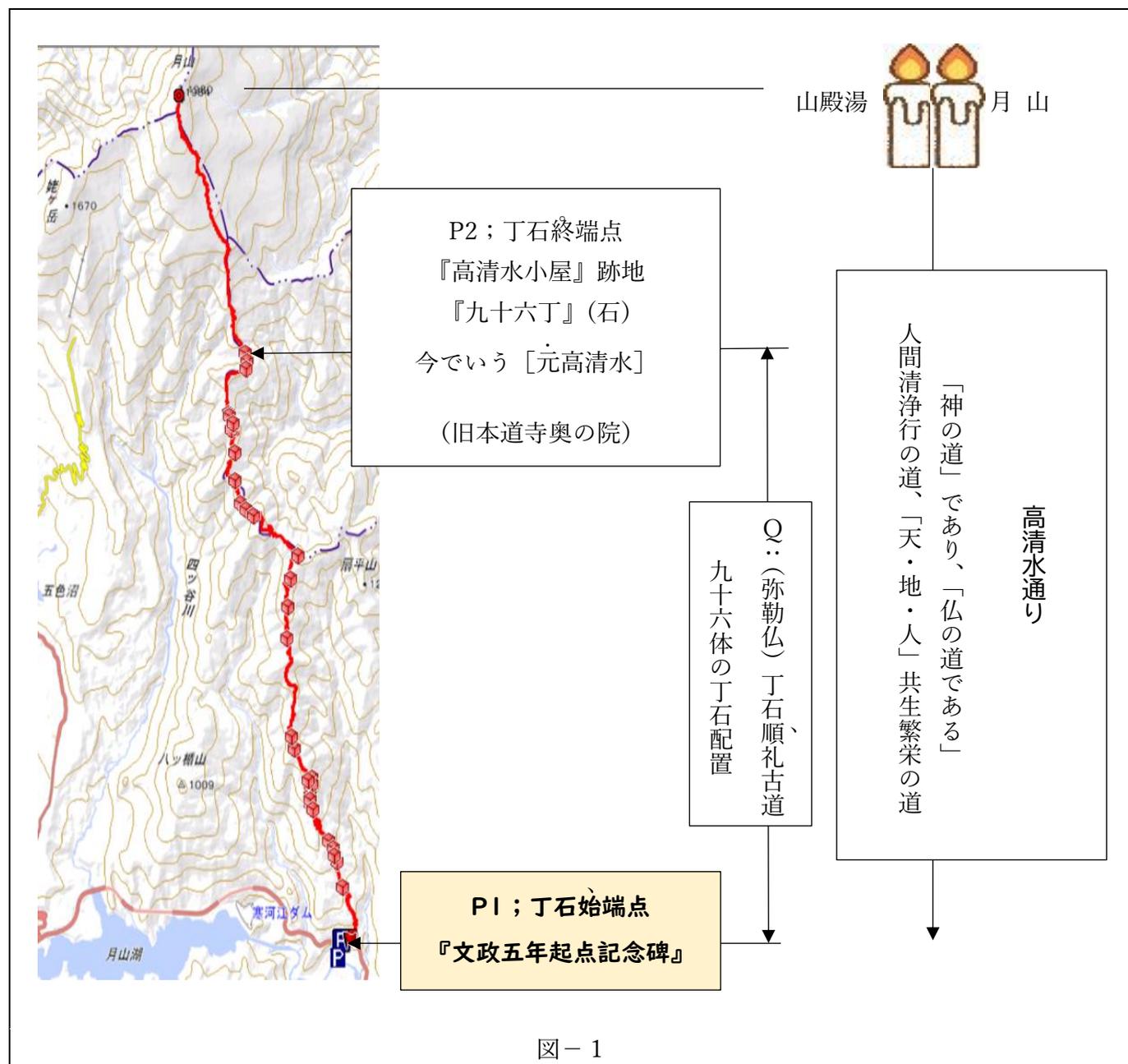


図-1

### 1. 同碑の刻字解説

碑文の内容は図(表)-2aのとおり。なお、図(表)-2bは現存30体中の途中の一つであるが、他の29体総ての右下に「同村」、左下に奉納者の氏名が刻されている。

### 2. 出身地（村）の読み解き

#### (1) 「達磨寺村」の掛かり方

起点記念碑に刻されている村名達磨寺村（今の中山町、国道112号山形県食肉公社の先、須川に架かる船町橋を渡って右に入ったエリア）は誰に掛かるのか？ 5名の出身地と身分は？ 各丁石は正面に向

かって右下に「同村」、真ん中に里程「丁」、左下に「寄進者名（施主）」を刻字しているが、どんな方々・身分だったのか？ 以下に探ってみた。

起点記念碑（西暦 1822 年建立）	途中の一つ、十四丁（石）
 <p style="text-align: center;">                         文政五年 達磨寺村                          里先達 不動院                          山先達 長清坊                          従是高清水迄九十六丁處                          佐藤九右衛門                          七月吉日 世話人 佐竹傳兵衛                          原田善兵衛                     </p>	 <p style="text-align: center;">                         同村                          十兵衛                          寄進者名                          同村                     </p>
図(表) - 2 a	図(表) - 2 b

図(表) - 3・4 は、住処の「村」の掛かり具合を検討するための図式・図表である。

a. どこの人なのか。 この丁（石）に登場するのは、全 101（5 + 96）名である。**明記されている村名は達磨寺村だけ**である。各人の住処の村を探る場合、①～④の 4 パターンが考えられる。その他、様々な想定はあるが煩雑を避ける。なお、この起点記念碑の左右両側面、背面には何も刻されていない。

達磨寺村			各丁石の主なもの						
			先達	世話人	一丁	九丁	四十八丁	九十五丁	九十六丁
(パターン)			2 名	3 名	未発見	『同村』	『同村』	不明	不明
						現存最初の丁石	中間の丁石	最終の一つ手前の丁石	最終の丁石
①	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
②	◎	—	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
③	◎	◎	—	◎	◎	◎	◎	◎	
④	◎	—	—	◎	◎	◎	◎	◎	
⑤（達磨寺以外）					□	□	□	□	□

図(表) - 3

パターン	捉え方
①	101名全員の居住地を達磨寺村と想定する視点
②	先達の2名を除く99名全員の出身地を達磨寺村と想定する視点
③	世話人の3名を除く98名全員の出身地を達磨寺村と想定する視点
④	名手（先達＋世話人）5名を除く96名全員の出身地を達磨寺村と想定する視点
⑤	1丁（石）に刻されている村名が残りの95体の各丁石に及ぶものとする視点。この想定 の根拠は、昔は誕生した年を以って1歳にしたことに由来し、1丁に基づき以下同文、 つまり、95体は同村にしたという見方である。しかし、残念ながら1丁（石）は発見に 至っていないのである。

図(表)－4

b. 以下にみる記述して行くが、**結論としては、理屈上は①と成り得るが、②であったと理解したい。**

c. この内容に続く「丁石を配置し、丁石奉納設置に至った地勢的背景」については別記する。

(2) 先達はどこの人？

山先達と里先達の役割については、西川町史等より抜粋し本章最後尾に参考に記述する。

(四) 志津の不動院について

志津の不動院については、「西川町史編集資料第三号の二 最上盛衰実録の中に」、「御朱印寺社領高之事、元和八年最上源五郎義俊御代滅亡なられ、則ち江戸より伊丹播摩守井上新左衛門御下向、其の節寺社領の高御改帳面持参なられ候て、寺社御奉行所に差出され候写し」の項に、次の様な記録が見える。

高五石 権現社領  
志津村 不動院

此の記録は「寒河江市教育委員会発行最上記」にも同じである。

扨て此の不動院は修験であったが、志津にも大井沢にも、此れに関する記録は全く見えない。若し志津に此の不動院が有ったとすれば、現在の分校敷地であったと思われる。

(五) 西村山郡史抜粋

最上清水実録 下

御朱印寺社領高之事

(五) 西村山郡史抜粋

最上清水実録 下

御朱印寺社領高之事

元和八壬戌年最上源五郎殿義俊御代、滅亡被<sub>レ</sub>成、則從江戸御城任衆ハ、伊丹播摩守井上新左衛門御下向被<sub>レ</sub>成、其節寺社領之高御改、御帳面持参被<sub>レ</sub>成候<sub>而</sub>、寺社御奉行江被<sub>レ</sub>差出<sub>レ</sub>候通写し。

左沢領内御朱印<sub>并</sub>御除地分

一 高五石六斗余 権現社領  
志津村 不動院

...

図(表)－5

a. 「里先達の不動院」については、諸説あろうが、西川町史などにより現在の志津温泉にかつて存在した「不動院」であろうと推察している。その理由は以下のとおり。判断資料は図(表)－5の西川町史編集資料第六号－「資料編集の前に (P2)」、山形市史資料第7号「古今夢物語 (P82)」の図(表)－6のとおりで、抜粋したもの。

<p>．．．</p> <p>百八十三石七斗四升 <small>寒河江橋北村 真言古儀</small> 総持寺</p> <p>日光権現領 五石六斗四升 <u>総持寺末 志津村 不動院</u></p> <p>．．．</p>
図(表)－6

また、総持寺繋がり、図(表)－7は最上三十三観音霊場 第16番札所長岡山長念寺（長岡観音）のHPより拝借した。

<p>長念寺は、山形県寒河江市丸内にある真言宗智山派の寺院です。長念寺の古い記録は伝わっていないので創建年代は不詳ですが、惣持寺という末寺約四十ヶ寺を持つ広大な寺院の末寺筆頭として室町期より知事役を務めていたと言われていいます。総持寺は清和天皇の貞観年間（859～877年）に真済僧正（弘法大師の直弟子）が長岡山山頂に御堂を建立し十一面観世音菩薩を安置して開山し、のちに寒河江城初代城主・大江親広が、守護仏として観音堂を建てたと伝えられています。明治維新の神仏分離令、廃仏毀釈で廃寺となり、寺格をはじめ貴重な仏像・仏具等の大部分が長念寺に譲渡され、長岡山頂上の観音堂も移しました。</p>
図(表)－7

さらに、図(表)－8は西川町史編集資料第六号 P15・P17 の一部を抜粋したもの。本道寺と志津は時に様々な確執・小競り合いはあったにせよ、最終的に湯殿山を目指す基点であったということを抑えておく。湯殿山はいうまでもなく真言宗の御山である。

<p>(四) 出羽国最上白岩領志津村百姓衆訴上差上候ニ付乍レ恐返答書 (C)</p> <p>一 湯殿山参詣通路之儀、志津村飛石通り并月山清水口申候而、元来二筋之路御座候然ニ此両所之道旧例御座候而、別當本道寺、佐藤常陸、布施新左衛門申候、三人之別當御座候故．．．</p> <p>天和三亥五月六日</p> <p style="text-align: center;">宝蔵坊 梅本坊 本道寺</p> <p>(六) 出羽國湯殿山参詣之道者、従二古来一清水道通 志津村海道両道通り候処．．．</p>
図(表)－8

図(表)－9は西川町史編集資料第六号 P120 の一部を抜粋した。明治の文書であって、「不動院」に直接結び付けられるかは断定しかねるが、志津村にあって、「大日如来と不動明王」を祀っていたことから、その昔は「不動院」のことだろうと考えている。

(七三) 大日不動両像の儀に付願書(明治六年二月)

解説

志津村にある大日如来と不動明王の両仏像を売却し、桑植の資金にしたいと県参事に願ひ、許可された。

大日不動両像之儀二付願書

第四大区小四ノ区志津村 税地建立

一 大日如来仏像

但地金唐金丈ヶ八尺、安永年中発起人岩代国久之浜浄円坊

同村

同断

一 不動明王仏像

但地金同断老丈八尺、天保十三寅年発起人岩代国白岩村修験五大院

右大日不動両像之儀、・・・

志津村

明治六年二月

図(表) - 9

丸山茂著「岩根澤の面影」58頁以降を参考に一部を図(表)-10に抜粋する。

・・・出羽三山関係で其の所領地が朱印状によって安堵されているのは、前述の羽黒山が1,550石を初めとして、湯殿山関係では、

六石五斗 湯殿山燈明料 月光山本道寺

六石四斗 〃 金色山大日時(大井澤)

五石六斗 〃 不動院(本道寺志津)

の三件ばかりで・・・

図(表) - 10

以上を纏めると、

**曰く第一説。** 江戸時代、寒河江に真言宗寺院総持寺があつて、その末寺の一つに志津村の不動院があつたことからすれば、前記起点記念碑の不動院は、この志津村不動院であると考えられる。他には寒河江日和田・朝日町八ツ沼などにも不動院はあるとされるが。

**曰く第二説。** しかし、次のようなことも伝わっている。不確かな点はあるが、達磨寺村上宿の東端に稲荷堂(稲荷神社)があり、管理者は隣接する佐藤家であつた。この家は長崎の修験昌常院の末派だつたらしいが、この佐藤家が不動院と称したとも伝わっており、本当の関係はあつたのか、なかつたのか? これ以外は何も分からない。なお、敷地内には湯殿山碑が数(2?)基見える。

**曰く第三説。** 現達磨寺在住者(某寺住職)によれば、その佐藤家を遡つても不動院ではない。可能性としては西側集落の『岡』に、不動沢という名称もあり、そちらに不動院があつたのではないか。

さて、ここで、「里先達は、山奥の志津村の人で成り得ただろうか」という疑問が湧く。つまり、「里先達は=平野部・里村に居住を構える人、山先達=山間部・山村に居住を構える人」という先入観・思い込みが邪魔している気がする。里先達はいわゆる営業マンであり、霞場・旦那場から道者・行者となるべき

人を募集して来る役割である、その役割を担う人の住処を山間部でだめ、里住まいでなければならないという掟・規則は本当にあったのだろうか。ただ、後記図(表)－15にあるとおりの「里先達とは宿坊の所在地に於ける移住者か」によれば、志津は旧本道寺の門前宿坊街であったことからしては、不動院が里先達を担うという考え方は妥当であると言える。

結論的には、不動院については、断定に値する史料を入手出来ず、不確か・不明である。  
しかし、私の直感、資料などからして志津村不動院だろうと思う。

b. 「山先達の長清坊」については、長井政太郎・小野芳次郎共著研究論文「六十里越街道と宗教聚落」——日本地理学会の「地理学評論」という機関誌の1942年に書かれたもの？——に図(表)－11のとおりの一節がある。横岫は現本道寺集落の近くにあり、周辺界限においては長清坊の存在を知る人ぞ知ることが判明した。

<p>－・・・本道寺に入る前に横岫と呼ばれる部落があるが、此處には來仙坊、<b>長清坊</b>、清學坊、長圓坊、山本坊、市藏坊、善長坊、盛岡坊(絶家)の坊があり、その内山本坊以下は歸農してしまいが來仙坊等四坊では今でも先達をしてゐる。是れは月岡にあった寶壽坊、砂子關の三學坊、石倉の大藏坊、入間の土佐坊等と同様に歸農してゐるが、白岩の三坊海味の坊と同様に<u>何れも本道寺の配下に属し、山先達に出てゐたらしいが、現在なお先達に出てゐるのは水澤の慶雲坊、清玄坊、海味の久圓坊のみである。・・・</u></p>
<p>図(表)－11</p>

(3) 世話人はどこの人？

これまで、原田善兵衛の他二人の素性(身分)について不明であったが、ここに来て、2025(R7)年7月中旬、中山町の高橋昌一さんから——煩瑣になるので簡潔に記すが、原田真一氏→[須貝勝司氏]→高橋氏——の経由で関係資料を入手することが出来た。近世(江戸時代)の達磨寺村役人を整理した資料である。その中から私の判断で主要諸元を図(表)－12のとおり抽出した、役職は変遷しているようだ。

氏名	初見年号	(今日まで続いている?)	役職
原田善兵衛(善兵エ)	1672(寛文12)年	⇒1850(嘉永3)年⇒・・・	名主
佐竹傳兵衛(伝兵衛、伝兵エ)	1696(寛文9)年	⇒1850(嘉永3)年⇒・・・	庄屋代
佐藤九右衛門[刻字]			
↓			
佐藤久右衛門(久右エ門)	1706(宝永3)年	⇒1862(文久2)年⇒・・・	組頭
<p>図(表)－12</p>			

a. 原田善兵衛については、最上家改易後、山野辺家の家臣が達磨寺村に歸農した後の分家で、江戸期から昭和期にかけて同村きっての豪農の一人であったようである。「中山町史資料編一」の古文書に名主としてあちこちに登場するという。

b. 佐竹傳兵衛については当初まったく手掛かりはなかったが、ここに来てようやく確認出来た。

c. 佐藤九右衛門については、石の刻字は「九」であるが、入手資料においては一貫して「久」の「久右衛門」であるが、「九=久」であり、表記の揺れとしては通常あることで同一人物と解釈することが出来る。なお、本道寺に存在していた名手(庄屋)の「佐藤久右衛門」ではないかという見方もある。久右

衛門は自身の素性を明かせない特別の事情があり、御山参詣に絡む色々な確執があって表に出たくなかったという一因も想像出来るという。

(4) まとめ

先達の居住地については「山先達 長清坊」は横岫、「里先達 不動院」は不確かだが志津という見立てを記述したが、別の疑義があって、共に個人なのか？ いや、組織・団体ではないのか？ という見方もある。あるいは、先達は別格であるから、一々居住地を表記しなくとも近隣在郷には広く知れ渡った人物だから自明の理である、公知の事実という認識であったのかもしれない。

さらに、個々の丁石には「同村」の刻字である。

世話人3人については、前記のとおりに達磨寺村の人である可能性大である、ほぼ間違いないだろう。

他方で、山・里先達を達磨寺村以外と決め付けることは妥当なのだろうか（先入観ではないのか）、確たる客観証拠（現物史料）が無い以上は、その視点そのものが根拠を失うものとなる。

すると、**図(表)－13ab**のいずれかの可能性ということだろうが、私としては、**推定2**の方、すなわち、「○1 両先達を除く世話人、および、丁石奉納者の総てが「達磨寺村」居住者であった。」と理解したい。

推定 1	推定 2
<p>あらためて、起点記念碑の碑文の文字配置を観察すると、冒頭に「達磨寺村」の村名である、その他は出て来ない。したがって、可能性確立の高い順に推定すれば、</p> <p>○1 山・里先達、および世話人、ならびに丁石奉納者の総てが「達磨寺村」居住者であった。</p> <p>○2 両先達を除く世話人、および、丁石奉納者の総てが「達磨寺村」居住者であった。</p>	<p>先達は言わずと知れた別格な人であったということと、資料を合わせて思慮すると、したがって、可能性確立の高い順に推定すれば、</p> <p>○1 両先達を除く世話人、および、丁石奉納者の総てが「達磨寺村」居住者であった。</p> <p>○2 山・里先達、および世話人、ならびに丁石奉納者の総てが「達磨寺村」居住者であった。</p>
図(表)－13a	図(表)－13b

なお、付則メモを記しておく。

✓ 1；最終「九十六丁」(石)には、他で見られる右側下部に『同村』、左側下部に『寄進者名』の刻字は見当たらない。背面にも何も書かれていない。摩滅したようにも見えない、最初から刻さなかったのか、書かなくても分かるだろうということは、おそらく、文政五(1822)年建立起点記念碑に刻字の世話人の5名が寄進したのであろうと推察している。それにしても、最終丁石に刻されていないはちょっと残念である。(先達も含むのか、いや、先達は金品を貰うことはあれ、拠出することはほぼ

なかったのではないか?)

- ✓ 2 ; 達磨寺村古文書において判明している寄進者は9体(8名)であり、当時の身分は百姓のように見える。別記の丁石一覧表中、氏名の下部に✓マークを記しておいた。
- ✓ 3 ; 2023(R5)年2月24日(金)中山町教育委員会関係者と対面し、本件に係る資料の有無を尋ねたが、記憶にないという返答であり、当時の達磨寺村は、あんなにも寄進出来るほど、とてもそんなに裕福だったとは思えないという観方もあった。

**いずれにしても、どんな繋がりでも清水通りにそんなにも大事業に係ったのか、まさに大不思議の一つである。**

#### 4. 丁石安置大事業の背景と目的

まずは格別の留意点がある。これら九十六体(合わせると97体)の丁石の安置は、今の私達の想像を遥かに超える地域・関係者にとっては大事業だったはずである。これら丁石については、直接の関係者は起点記念碑に5名・各丁石奉納者96名、間接的には少なくとも旧本道寺の宥勝住職<sup>ゆうしょう</sup>1名と、全体では少なくとも102名、石工等それ以上の善意ある人達が係り、約10.5kmの間に安置したのである。私(大沼)の各地の歴史古道を歩いた経験では、峠までの登り半分に33体の観音仏像を、降り半分に33体の、合計66体の観音仏像を安置している事例はあちらこちらにあるが、96体という数の多さでは他に類を見ない、のではないのか。

しかし、西川町史や中山町史の編集に係る関係者などから聞き取りしている処では、係る史料が見付かっていない。この大事業に係る古文書などの何らかの書付がどこかのお蔵・倉庫に眠っているのか否か? 先達2名の特定をしたいが如何に? 想像するにしても、この大事業に至った経緯や時代背景をもっと幅広く考察したいが如何に?

(1) まずは背景を想像して見る。

✓ 1 ; 天明の大飢饉に簡単に触れる。江戸中期の1782年(天明2年)から1788年(天明8年)に掛けて全国的に襲来した飢饉で、作物の不作、多数の餓死者が発生したと云われている。もちろん、当地、いわゆる白岩領域にも影響があった。なお、1788年から34年後が建立の1822年である。

✓ 2 ; さて、本件、当時は清水別当の無住化、地元派と宝蔵院派との内部対立発覚、周辺一帯に及ぶ鉾山開発の動きや不届き者の出入り、あるいは強弱はあれ気象異変(冷害・洪水・飢饉・干ばつなど)や鳥獣被害があり、ある面、<sup>ざっぱく</sup>雑駁・混迷した世の中、不安定な社会だったかもしれない。特に本道寺(寺も集落も)は疲弊し余裕がなかった、純粋な信仰登拝が一時期衰退の憂き目に遭ったのかもしれない。例えば、冷害等を考えると、本道寺周域は谷間であって日照時間は短い、達磨寺村(今の中山町)周域は平野部にあり、日照の恩恵を受けた復元力は勢いを増し回復が早まったのかもしれない。

✓ ; そうした中で、再度、参詣往来の活気を取り戻したいとなった達磨寺村民を中心に取り巻きの里先達・山先達、世話人や百姓連中は、

○先祖代々お世話になって来た本道寺(寺も集落も)・本通りに感謝の心を捧げたく、助け合い、救援、今でいう福祉、篤志活動の機運が高まった。

○理由の如何を問わず本通りへの無断立入りを許さないとした。

○鉾山関係山師に対しては秩序ある開発を促した。

等の理由を以って、従来にも増して濃厚な神仏霊気の網を張りたいという動機が働いたのだろう。共存共栄を願ったその具現化が「九十六丁」石の奉納安置に成ったのではなかったのか。

もしかして、鉾山関係者は、神仏に対する呵責や地元への配慮から作善供養の心を以って寄進・喜捨に加わった可能性もある。そして、各丁石の運搬（背負い）は、寄進者等の直接の関係者と心ある鉾山関係者（山師・鉾夫）が共同・協働で行ったのだらうと推察している。

岩根沢の清川坊は里先達・山先達を兼務しており、達磨寺村はその檀家であった。近年まで原田善兵衛（屋号）家の子孫が、清川坊と岩根沢三山神社に初もうでとご挨拶で参っていたということである。清川坊については細部を別記しているが、旧日月寺（今の岩根沢三山神社）の塔中本先達、別当の職に就いていたことから、同坊親戚筋によると鉾山師（山師）との繋がりがあったのではないかという見方があり、そうすると、高清水通りを通行させて貰っていた鉾山師（山師）的心情を以って、原田善兵衛らの世話人が寄進したのではないかと推察している。

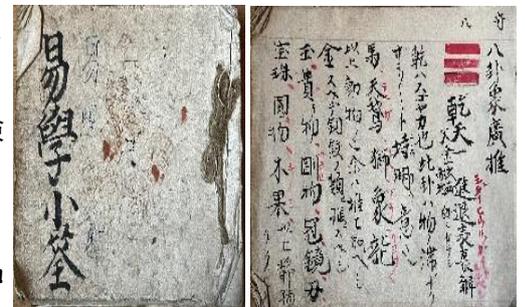
## （2）建立年月の意味合い

昔は、建立年月を設定するに当って、陰陽五行説や易経を駆使し、呪術的意味合いを十分に吟味したはずと推察している、世の中が転変・動揺の不確かな時にあっては、なおさらのこと行事の中身と意味付けに留意したはずである。そうした中での文政 5（1822）年は干支「壬午」年である。図(表)－14 のとおり、水気と火気で陰陽相対(待)調和の年である。建立月は七月である、旧暦のお盆月である、言うまでもなく精霊となったご先祖をご自宅にお迎えして供養する行事を指す。神（火水）に昇華したであらう諸人の先祖供養を重ねたく、縁起が良い火気・水気の相対結びの年で、かつ真夏のお盆を選んだということだろうか。

十干		五行	十二支	
陽	陰		陽	陰
甲	乙	木	寅	卯
丙	丁	火	午	巳
戊	己	土	辰・戌	丑・未
庚	辛	金	申	酉
壬	癸	水	子	亥

図(表)－14

唐突に易経を持ち出したのには理由がある。前出清川坊の遺品に図－15 のとおりに「易学（易経）」の学習テキストがある。陰陽五行説や易経は、道者・行者（信者）と神仏を結ぶ仲介者としての験力を高めるために必需の哲学だったのである。



図－15

## （3）その上で、この大事業の真の目的は何だったのか、真相は如何に？

以上のことからは、背景を踏まえ、達磨寺集落の人達を中心に、疲弊していた本道寺を救済するための慈善事業、利他行・喜捨行（「無償の愛」の実践）の一貫だったのではなかろうか？ 出羽三山信仰の中枢部・核心部に至る参詣道「高清水通り」に参らせて貰った事に対する感謝の表し方だったのではなかろうか。あるいは、その他、鉾山開発を巡ったいざこざの代償だったのだろうか。このような動きの裏に功利性（利益獲得）を孕んだ政治的意図のありや否やもある。

いずれにしても、明確な「達磨寺村」からは、現中山町において、何か手がかりを探って欲しいと切望するものである。

## 5. 開眼供養

想像するに盛大な入魂儀式・開眼供養を挙行了したことだらう、それは本通り天地間に「神仏一（注）因陀羅（注）網」を張ったものに等しく、いわば、本通り天地間五大（地水火風空）に神仏靈気を染み込ませたも

と推測している。

(注) 色んな説明はあるが、鎌田茂雄著「華嚴の思想」から拝借する。「一・・・・『一即多 多即一』は華嚴経で説かれる一番根本的な考え方である。空間的にも、一点の中に全世界が映し出されるということで、ヨーロッパでいうとライプニッツの「モノドロジー（量子論）のような考え方である。一つのモノド（元素）の中に全宇宙が映し出されるという考え方で華嚴経と重なる。因陀羅網で説明すると、網のA点を持ち上げると無限にあらゆる点が絡み合っていく、B点を持ち上げると無限に絡んでいく、C点を持ち上げると無限にこれが関係してくる。・・・インドラの網とは帝釈天宮にある宝網でのことで、その結び目にある珠玉が互いに相映じ、映じた玉がまた映じ合って無限に映じる関係で以って、華嚴の重々無尽を説明するのである。一・・・・」 因縁生起の無限連鎖を説いているのである。

(1) 表に出て来るのは地元本道寺以外——世話人佐藤九右衛門は本道寺の人という確証を得られていない——の人達に見える、逆に言うと本道寺の人達の関与は見えないが、**公認された山先達の誘導なくしては入れない高清水通りにおいては、地元（旧本道寺住職）の了承なくして安置出来るはずはない。**この頃

の本道寺住職は『宥勝』であった。計97(1+96)体の丁石はただの石ころではなく、神仏の魂を入れ込んで拝みたくなるものにしなければならないはず。そのために、起点記念碑と共に96体の丁石全部を用意して、寄進奉納者、関係者や近隣在郷の百姓連中が総結集・参列して、宥勝を導師として、入魂の儀式、開眼供養という斎儀を盛大に挙行したことだろう。その魂は「大日如来×阿弥陀如来×薬師如来」と、「弥勒菩薩」ではないかと想像している。それぞれの丁石には、本通り立入に対する監視眼の発光力を、行者の崇拜心に対する応現力を、通行者みんなへの帰依教化・教導の神通力を植え込んだのだろう。神仏の魂を持った畏れ多いものとなったのである。その理由は別記したとおりの「九十六」の由緒に基づく、こうなると、もはや石ころではない。その上で、一つひとつを背負って1丁(109m)間隔を測定しながら安置したのだろうか、それとも、現地への安置は数年を要したのだろうか、はたまた、石は現地調達でその都度、石鑿のみを入れて刻字したのであろうか。あるいは戻って、一つひとつの石は寄進者自らが探し当て用意したものであろうか。その開眼供養式は同社境内のどの場所で行ったのだろうか……。興味は尽きなく大いなる想像が掻き立てられる。

(2) 当時の本道寺住職『宥勝』の事蹟に少し触れる。文化4(1807)年から文政12(1829)年までの13年間第三十三世として寺の発展に貢献し、また、俳号を淋山と称して地方俳壇を指導した高僧であった。また、寒河江の慈恩寺や新庄の円満字の住職も勤められた名僧であった。



図-16a



図-16b

その宥勝ゆうしょう自らが造立し、文政七(1824)年に安置したのが図-16aの仏足石(口之宮湯殿山神社拜殿入口左側)である。また、駐車場からの登り口・男坂右手にある同図bの芭蕉碑は寺中の方々と共に造立したものである。また、現在の本道寺集落にある第一鳥居・山門を潜った先の大日坂石階段整備も功績の一つである。

そんな中で、97(96+1)体の安置を許した、しかし、他方で自分の名を刻することを許さなかったのだろう。人はとかく少し絡んだだけで人を押し退けてまでも自分の手柄にして、他人の功績を横取りして名声を得たく目立ちたがるのは今も昔も変わらないが、人望厚い高僧なるが故の人間性というものだろう。

## 【 参 考 - 1 】 先達とは

西川町史編集資料 第八号 (二) 52 頁から 53 頁より抜粋し、図(表) - 17 に記述する。

先達には山先達と里先達の二種類あるが、先達は元々修験者であったから坊という名が付けられた。大衆からはこれら先達を修験様と呼ばれていた。しかし、山先達は必ずしも修験の免許を持つ者とは限らず、本道寺自体で一定の講習作法を受けた者を山先達とした。・・・山先達の本質は本道寺より湯殿山に参拝する者(道者)を、途中、安全と心配ないように保護誘導し、兼ねて霊前においては道者の代務として祈念祈祷するのが本務であった・・・

里先達が里から本道寺までを案内する。本道寺から湯殿山まで往復は山先達の担当路である。而此の山先達は一定枚数の守札を持ち、遠くは越後・武蔵の国までも各家々を廻り、身体健康・家内安全・無病息災・五穀豊穰等希望に応じたお祈りをするものである。又其の家の特定の祈禱もする場合があって、此れが本寺の知らない山先達の懐収入ともなっていた。

里先達は里に在って湯殿山信仰を広める重要な任務を持ち、此の人は必ず修験免許を持っているが、山先達の霞場と違う所は、山先達の霞場は各所に散在しているが、里先達の霞場は所在地のみである。そして里先達は互いに所在地を専有するが、山先達との間では里先達の霞場を兼ねる事が出来る。山先達の檀廻は年に一度か、又は数年に一回位なもので、里先達は通年其所の住民を守り続けて居るのであって、むしろ里先達と山先達との連絡提携こそは人情のつながりがあり、湯殿山繁栄をもたらす重要な任務でもあった。里先達は里から本道寺までを案内する。本道寺から湯殿山までは山先達の担当路である。道者参拜に里先達も同行するのが立前である。本道寺は真言宗であるから里先達も又真言宗とは限らないし、天台宗も日蓮宗の先達や浄土宗の先達もあつたらしい。(志津石塔坂供養碑より)

本道寺と大日寺も宗派に云々せず自由にしているが、服装は道者姿で、参拜は山先達に依って真言宗形式にし、こうすることに依って参拜者の増加を計って行った。

又里先達は本道寺や大日寺、つまり本山に登録している者もあれば、無登録の者もあって、此の人数を把握する事は出来なかった。でも里先達間に霞場に異常が生じた場合は、本山寺に其の裁断を受ける場合があった。湯殿山参詣と言っても遠方の者が巨額の金銭が必要であり、又身体的にも自信のある者でなければ出来ない。それで下野上野の遠い所では、信仰はあっても参詣されず、湯殿山の御利益を受けようとしても不可能の場合は、里先達や山先達を頼み、本山に代わり参詣を願い祈禱して貰う方法を取った。これが代参であって、三十三度参詣供養塔の建立あるのはそれである。此れには里先達が講中の音頭を取り、代参は本山が山先達に代参料を与えて参拜させる方式を取っている。此れは講中・里先達・本山・山先達間の連携であった。

### 図(表) - 17

丸山茂著「岩根澤の面影」103 頁より図(表) - 18 に抜粋する。

ところで、里先達・山先達というと伊勢信仰や大山信仰で活躍した「御師(おし、あるいは、おんし)」、「先導師」の存在を想起するが、役割はとても類似している。

・・・道者が此等の宿坊に休泊時は、里先達が遠方まで出向いて宿坊まで導き入れる、里先達とは宿坊の所在地に於ける移住者か、又は旦那場に於ける修験者である。山先達とは宿坊の経営者、又はその  
ようにん  
傭人で、専ら三山参詣者を先導する役に当るものを称した。・・・由来三山は原則として、先達なくして登山登拝は許されなかった。

図(表)－18

【 参 考－2 】西川町ホームページ「デジタル資料館－石碑石仏資料－丁石」

図(表)－19のように記載されている。仮に力自慢競争の側面があったとしても、それが大事業の直接目的には成り得ない。“その右側に『日符』”の日符とは何ぞや？ 『同村』が正しいが読み間違いであろう。“左側には石を運んだ個人の名前”とは如何に？ 確かに名前には間違いはないが、「寄進した人であり、かつ力持ち」というのであれば理解出来るものの運んだ人を刻するということは考え難い。「サイトウバは95丁」というが、2022（令和）4年10月9日（日）、94丁を私（大沼）自身が地中から発見したが、柴燈場から95丁までは約155m、94丁までは約20mなので、あえて表記（記述）するのであれば、「サイトウバは94丁」が正しい。

この文章を書いた人は、本件のような調査を行っていないだろうからこのような結末にしているのはやむを得ないが、それにしても伝承自体が信憑性において真実からは程遠い、

湯殿山神社から**柴燈場（月山）の登山道**に点在する丁石。江戸中期に地元の若者達が力自慢を競い、川原の石を運んだと伝わる。1丁=60間（約109m）としてほぼ正確な距離を示している。途中のブナ林に埋没したり、消失した石もあると推測される。33丁の先に姥像が祀られ、サイトウバは95丁である。およそ形の揃った石の表面の中央に距離（丁）が示され、その右側に『日符』左側には石を運んだ個人の名前が刻まれている。

図(表)－19

<end>